

七日も過ぎると熱も下がり、脚気も次第に良くなってきた。海岸には椰子の実が多くあり、それで救助されたのである。

八月十八日終戦を知らされた。今後は身体を大切にしておいて故国に帰るため頑張ろうと小隊長に激励された。その後はマラリヤと栄養失調で次第に衰弱していく体をいたわり病氣と戦うのである。

武装解除された私たちは十一月十日ごろ、英軍大型上陸用舟艇に乗船、アピ収容所の古田部隊長の木隊に集結した。この時ほど心暖かく安心したことはない。収容所は抑留生活と作業がある。監視隊は豪州軍から英邦軍に代わり、好意的であった。そして二十二年春を迎える。

毎朝の点呼の時、東に向かって拝礼し、敗戦後の故国の復興と隆盛を誓うのである。しかし故国は占領されていて、内容もさっぱり分からないし、何時帰れるのか毎日日の出を拝して、戦友とお互いに励まし合うのである。

三月になると内地帰還の話が聞かれ、みんな希望と期待を得て頑張る。

四月十三日空母葛城に乗艦、思い出深きボルネオよ、

サンダカンよ、戦病死した友の冥福を祈り別れを告げる。

艦は一路故国へ急ぎ、四月二十四日大竹港に上陸し兵学校に収容される。二十五日に復員完結し兵長になる。

各々の家から便りがあり、悲喜こもこもの情景であった。別れを惜しむ一夜は明け、広島駅からそれぞれの故郷へと汽車は行く。

二十八日懐かしい家にたどり着いた。仏間の亡父に帰還の報告をする。やつれた母や妻子、そして弟妹たち、みんな無事を喜び合う。数か月で心身の健康を取り戻した。

戦争と平和 そして国際親善

神奈川県 森田 六郎

戦争とは何ぞや。古来歴史上の文献をひもとけば、それは人類の非道極まりない闘争であり、民族の興亡をかけた戦いであり、また自己の欲望達成のために手段を選ばず、敵対する人々を殺戮し征服するための暴虐な蛮行

をいう。

私ども日本人は近代すなわち明治時代に日清、日露の両戦役を体験し、大正時代にはシベリヤ出兵と第一次欧州大戦に参戦した。昭和時代にはいるや隣国中華民国に戦いを宣し、満州に押し入り、なお足らずに中国全土に戦場を拡大し、幾多の隣人を傷つけ、その地を焼土と化し、悪逆非道の限りを尽くしてきたのである。

昭和十六年十二月八日、無謀極まりない第二次世界大戦へと突入した。顧みればその行為は世界人類への挑戦でありました。しかし一億の国民が己の行為に何ら疑問を抱くことなく自ら進んで戦争に参加し、己れの生死も顧みず戦い、そして敗れた。その日々を回想するとき改めて戦争とは何であったかを深く反省し、その犠牲となった幾百万の同胞や国外の人々に対し如何にあるべきかが、現在問われております。

戦場で幾多の戦友が倒れ傷つき、尊い命が「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍」と万葉の防人のごとく祖国日本の弥栄を願い、父母兄弟姉妹一族の末永い繁栄を夢に見ながら悪戦苦闘の末、武運つたなく護国の礎と

なった。これら戦友諸兄の心情を偲ぶ時、今更のように「平和」への願望が今でも心に響く思いがいたします。

人間は生死の境に立つと死ぬことが業であり、生きることは至難の業となります。私は南方派遣軍第三十七軍灘独立第五三大隊の一兵として参戦し、二〇〇〇キに及ぶジャングルの中のけもの道を踏破、重度のマラリアにかかり、朦朧として意識も薄れ、加えて栄養失調となり、半死半生の状態となりました。幾人かの戦友は苦痛に耐えかねて自ら死を選ぶ者もありましたが、その地獄のような死線をどのように突破し生還したのかいまだ不明です。かような体験を経て終戦となり、懐かしい祖国日本に辿り着くことを願いました。戦争が終わり、平和の女神が私を導いてくれたものと感謝し、改めて平和の尊さを忘れることはできません。

勤務地及び現地入隊

昭和十七年七月以降、現在のマレーシア連邦国サラワク州はボルネオ島の北西部にいました。任務はイギリス人の経営する製材工場の経営管理でした。

サラワク最大の規模をもつレジャン河の上流で、そこ

は全く人里から離れたジャングルを開拓して作られた英国人の工場でした。先輩と私のほかはすべて中国人、マレー人、印度人とダイヤ族で、幸い工場資材は完全に残置してあり、経営者が英国人から日本人に変わったただけの状態であった。

この地で丸二年二か月、熱帯樹林の実地研究と五百人余の従業員的生活安定をはかり、秩序ある工場運営を行い、作戦命令でくる軍事施設構築のために、資材生産を円滑に遂行することが任務でした。

懷中に一丁の拳銃も持たず相互信頼を基調として、時には昼夜二十四時間操業を八十日間も行つなど、当時の日本内地ではできない工場運営も行い、軍政部から数度の恩賞を頂くほどでした。

昭和十九年十月戦雲急となり、私にも現地召集の日がきて、北ボルネオ最高峰キナバル山、標高四一〇一メートルの山麓ラナウ高原で入隊し、初年兵教育を受ける身となった。

マラリヤ熱帯熱で野戦病院へ入院

当時すでに現地生活を二年以上体験し言葉も十分体得

し、風俗習慣まで修得したためか、従来の日本軍国主義の弊害と、現実との矛盾に悩むことが多く、その誤りを見通す能力を持っていた。また世界の情報も徐々に入手する手段も身に付き、戦争の将来に対してもある種の予感を自然に感じていた。一期の検閲が終わり教育期間が終了し配属部隊が決まったころには昭和二十年となっていた。現地のマレー語修得が役立ち、瀧軍司令部へ配属され、後方勤務となり司令部のあるアピー（現在のコタキナバル市）に到着した。

その夜マラリヤ熱帯熱となり、即第十一野戦病院に収患され以後十三日間、意識不明であった。しかし幸い野戦病院に入ったために九死に一生を得て死の淵から這い上がったと言われた。しかし高熱で衰弱し骨と皮だけとなり、腰の骨が飛び出ている我が身を見ることができなほどであった。そのころ友邦ドイツが降伏したと報ぜられ、いよいよ玉砕か死か、いずれかを選択する以外にない一人考えるに至った。

転進歩行二〇〇〇キロの戦争

意識が回復して数日後、当時アピーで兵站宿舎をして

いた知人小山田氏（故人・東京都出身）が私を探し出して下さり、以後は、食料、果物を毎日補給して頂き、そのお蔭で元氣回復し歩行も可能となり、一か月後には原隊復帰が許されるようになった。

この人は私の命の恩人として厚く感謝し、今でも遺影を拝している。そのころ原隊は転進命令を受けブルネイに渡る直前で、船持ちという連絡の将校が病院にきた。そこでどうせ死ぬ身ならば野戦病院ではなく、原隊の戦友とともに戦って死ぬことこそ男児の本懐と思いフラフラしながら病院長に申告し、原隊追跡となった。

その距離五〇〇^キぐらいか、病後の体で軽便鉄道の線路上を昼夜を分かたず歩き通し、数日後にはキマニス鉄橋附近でついに原隊復帰を達成した。

その後ブルネイ、ミリと油田地帯を走破し、部隊の先遣隊に加えられ、ピンツルまで七十日にわたる二〇〇〇^キに及ぶ主として海岸線を転進した。

時あたかも連合軍は、ボルネオ油田地域奪回作戦の寸前であり、部隊本部はミリ地区において迎撃戦闘の渦中に入り、ついに復員するまでその消息を知ることはでき

なかった。

このように私の前後には死地といえる戦場となった二〇〇〇^キの広範な油田地帯を含む我攻防の最重要地帯があり、したがってその犠牲者も膨大な数となった。先遣隊となった最前線での苦痛はその極に達し、部隊行動にはならず、ただ黙々と三々五々各人が縦列になり機械的に歩行を続けるだけで、無言の行進であり、一歩列から離れた者は死を意味する正にサバイバルな戦いでありました。しかも制空権は敵の手中にあり、したがって夜間の行動が多く、ほとんど全員がマラリアと栄養失調による脚気になり、軍靴は破れ海岸の砂が足下に食い込む。この世の地獄の様相を呈したが、昼間の太陽だけは、灼熱のごとく燃え、日中の気温は四〇度を越える。

これが戦争であり戦場であった。そして最後の目的地ピンツル飛行場に至るころは、先遣隊一個小隊は半数以下となっていた。なんという無惨。このような行動が日本軍という部隊の姿であった。ただ一つ幸いなことは、銃を射つ戦闘もなく過ぎたことであった。

キナバル会（戦友会）

昭和十九年十月現地で入隊したものは、南北ボルネオ島全域から召集された。比較的若年層の者たちで、軍属、燃料廠技術者、農漁業者及び当時の日本の代表的企業の社員たちで、総員七五〇余人が集結し、現地灘軍に編成され、初年兵教育三か月で終了し各部隊に配属され、直ちに最前線に出ることとなった。

この兵隊たちはほとんど日本では高等教育を受け、後に南方地域に出て働き、戦前からの人も多くいた。すなわちインテリと称される者たちであり、決して身体の頑強な戦闘要員となりうる者ではなかった。果たせるかな終戦となり、復員名簿の作成に数年を要し戦友名簿の整理の結果、戦没者四五三人、生存者は二九七人のみで、六〇%強が英霊となっていた。大半がマラリヤと栄養失調による病死であり、戦闘で戦死した数は僅少であった。現在、私はキナバル会（戦友会）の事務局長として、毎年一回全国各地において大会を催し、亡き戦友を偲びお互いの親睦を温め合っている。その回数もすでに二十回を越え、本年も六月京都において関西支部諸兄の骨折りで盛大に行われる予定です。

慰霊巡拝と遺骨収集

大戦後しばらくブランクがありましたが一九六三年マレーシア連邦国の独立を契機に、再びボルネオ島森林調査の社命を帯び渡航することとなった。懐中には線香と数珠を持ち、あの忘れ難い北ボルネオの山河を巡り、サラワク州各地を四十数日かけての大旅行に単身出発した。幾多の戦友が眠るかの地を回り回向を重ねる度に、英霊の祖国帰還という願望が固まり、厚生省援護局へ行く日が多くなり、昭和四十九年七月キナバル会戦友諸氏を案内し、香港、コタキナバル、ミリ、クチンと巡拝し帰国した。

五十一年再度戦友会二十数人とともに現地を巡拝、無事その役目を果たす。そのほか、毎年二、三回は社用で東南アジア地域への海外出張があり、現地の人々との交流も頻繁となり、私の身辺も一段と多忙となりました。

しかし昭和五十六年五月、日ごろの無理が重なり椎間板ヘルニア（腰痛）となり、ドクター・ストップを宣されるに及び、海外出張は勿論、日常業務も不能となり、東京通信病院へ入院加療する身となった。そしてついに手

術を要するといわれ、やむなく手術台にのりました。

ここに至り、会社の経営を断念し、一切の公職を辞任、四十年以上にわたり酷使し続けた心身をオーバーホールする意味で療養に専念することとし、六か月間入院生活を送ることとなった。

しかしようやく病から解放されて帰宅すると、ボルネオの遺骨収集という大役を戦友団体から申し込まれることとなった。病後のことであり、だれか適任者を探すよう進言したが、長期にわたる作業であり、現地に精通しているものとして最適任者なりという理由で推薦を受け、昭和五十八年十月十九日から十一月十七日に至る一か月にわたる厚生省派遣第四次北ボルネオ地区遺骨収集の戦友代表として参加することとなった。しかし主治医からは承諾を得ることはできなかった。

厚生省ではこの地区の遺骨収集は今期をもって終了すると聞かされ、ついに意を決して同行した次第である。

その間、現地領事館及びサバ、サラワク両政府との交渉から始まり旅行手配、宿泊、通信、諸事万般に至るほか、奥地に入ると英語は通用せず、マレー語の通訳も私が引

き受けざるを得ず、寝食の時間もないほど多忙な毎日であったが、地下に眠る英霊が一体でも多く祖国日本に帰還して頂くための奉仕であり、全力投球で頑張りました。幸い持病となった腰痛も再発することなく、無事務めを終わることができたのも、一重に地下の英霊が援助してくれたものと深甚の感謝をして、遺骨を捧げて帰り、千鳥ヶ淵に納めることができました。

国際親善について

以上の永い半世紀に及ぶ私と現地マレーシア連邦の方々との交流は、戦争という不幸な出来事に始まりましたが、大戦後再び平和な時代に戻り、相互の貿易業務を通じ、お互いの信頼が自然に生れ育ちました。そこで私は企業の第一線から後退しましたが、相互の友誼は一層深まり、彼らとの交流を絶やさぬために多くの同志あいい計り、日本サラワク親善友好協会を設立しました。会員は現在八十数人の小さい任意団体ですが、昭和六十年七月発会式を行い、今年ですでに四年目になりました。趣旨は戦争で多くの人命や数多くの迷惑をかけた現地の方々と手を取り合い、少しでも援助や協力ができるこ

とを實行し、今後ともどもに永久に親睦を続けて、これから続く後代の若い方々にこの事業を繼承して頂き、立派な組織とするための運動をいたします。

この日本サラワク親善友好協会と、現在かの地に育成されつつあるサラワク日本親善友好協会の二つの組織が毎年一度会議を開催し、双方が平等互恵の精神で討議し、その中から相互扶助の実が達成することを願い、進めております。

すでに昭和六十二年八月第一次親善訪問五十人、平成元年八月第二次親善訪問四十七人の二度の親善旅行を行い、各地で非常な歓迎をして頂きました。

また州都クチン市では日本語の講習会が毎週三回行われており、わが協会では教科書その他を送り、奉仕しております。

以上のとおり恩讐を越えた中から、真の国際親善が確立されるものと信じ、平成二年も頑張る決意です。

南太平洋作戦記

愛知県 堀内 初一

昭和十七年十一月三日、歩兵第二百二十八連隊の主力は駆逐艦十七隻に分乗し、運命の島ガダルカナルへと向かった。

航行途中、真暗闇の中に赤い光がひらめき合う海戦が起きた。激戦であるが、我々陸軍は手の出しようがない。海軍に頼るより方法がなく無念の数時間だった。幸いにして沈没を免れ上陸地点に進入、大発に慌ただしく分乗して上陸を敢行した。渚近くで海中に飛び込み我れ先にと上陸したものである。上陸地はあとで分かったのだが、タサファロングであった。

兵の背の上には、米一斗入りの南京袋が背負わされていた。陸に上がった時はすでに真っ暗な夜であった。出迎えの懐中電灯が二、三地面を明るくしていたのが印象的であった。部隊は集結もどかしく、せきたてられ